

## 予防医学的文脈で用いられる『未病』概念の 東洋医学的研究

加藤豊広\*

### Oriental Medical Study of a “Wei Bing” Concept Used in the Preventive Medicine-context

Toyohiro Kato

Chukyo Women's University

*Zhi wei bing* (treatment of pre-disease) is generally considered as a model corresponding to western preventive medicine. In this study, I have examined the definitions of *wei bing* (pre-disease) in traditional Chinese medicine.

I have closely examined the classics of Chinese medicine that refer to *zhi wei bing* (treatment of *wei bing*), namely : Huangdi Neijing Suwen (Yellow Emperor's Classic of Internal Medicine : Simple Questions), Huangdi Neijing Lingshu (Yellow Emperor's Classic of Internal Medicine : Difficult Questions), Nan Ching (Classic of Difficult Issues in Eighty-one Chapters).

The following definitions for *zhi wei bing* were confirmed. Treatment for the initial stages of a disease.

#### キーワード

未病 Wei Bing

黄帝内経素問 Huangdi Neijing Suwen

黄帝内経靈樞 Huangdi Neijing Lingshu

難経 Nan Ching

---

\*現所属 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科健康科学専攻人間環境学講座環境医学分野  
(執筆時 中京女子大学)

## I. はじめに

平成9年の「厚生白書」(厚生省, 1997, p.61)には「未病概念」という言葉が使用され、次のように記述されている。

「病気の発症をその予兆によって知り予防するとともに、いったん発病した場合であっても重篤にならないように早期・適切に処置することが肝要であり、これによって疾病の他の臓器への拡散・転移および疾病の悪循環の防止が期待できるとされる」

現在の厚生労働省が掲げる「健康日本21」(多田羅, 2001, pp.68-69)では、第1次予防は健康の増進・発病予防を掲げ、第2次予防として早期発見早期治療、第3次予防としてリハビリテーションをあげている。このうちの第1次予防は、東洋医学の「未病」概念を取り込んだとされている。しかし、予防医学モデルからいえば第3次予防の「治療」ないし第2次予防の「早期発見早期治療」に相当するもので、第1次予防の意味で「未病」を用いることは東洋医学的には本来の意味ではない。

第1次予防とは、健康な生体に対して、疾病に罹患し難い状態にする目的で何らかの処置を講ずるもので、現代西洋医学では、予防接種はまだ感染が成立していない健康な生体に対して行われ、感染の初期に対しては行われない。体育・スポーツなどは行動体力を向上することで防衛体力を向上させることを期待して、健康な身体に対して疾病の予防を目的で行われる。

古代中国医学においても同様に、第1次予防は健康な状態に対して行われる。「黄帝内経素問」の「上古天真論篇第一」には、「道」を究めれば、身体強健となり疾病予防や抗老化作用があり、究極的には、疾病・老化・寿命から開放された状態にある「真人」になれるという記載がある。これらをグレードにより、真人、至人、聖人、賢人の4段階に分けて簡単な説明を記述している(篠原監

修, 1993, pp.14-16)。この「道」が古代中国医学の第1次予防の方法論である。

また、「未病」は字の意味としても疾病の初期（疾）を表す。「角川字源辞典」には、「病」の字義として、「疾のいっそう加重する意。『疾，病なり』の語があることによって，よく分かるであろう。」（加藤，山田，進藤，1990，p.422）とあり，学燈社の「漢字語源辞典」には，「疾の加わるなり。疒+丙声」……〈論語，述而〉の「子の疾，病なり」がその用例で，危篤のさい両股が硬直してピンと張ること。のち，「疾病」と熟したため，たんに「やまい」の意となった。（藤堂，1977，p.444）」とある。したがって，未だ病にあらずという状態は，疾の状態を表し，病の状態は重病になった状態を表していると考えられる。

このように，未だ病にあらずという状態は，疾の状態であると考えられ，漢字の語源から見ても，「未病」は疾病の初期を表わすといえる。実際，古典の医学書の記述には，「未病」は治療対象となっており，顔色をうかがう望診などの検査法により病理学的変化が確実に認識されている。その治療法は，ライフスタイルの指導から，鍼治療，食事療法に至るまでさまざまな治療が必要とされ，施されている。古代中国医学モデルは，液体（気・血・水）病理学説，病気非実体論で構成されている。気の流れの不均衡などは，器質的变化が起こる前段階であり，疾病が実体をもって存在を現わしていないことが多い。したがって中国医学モデルで病理学的状態を認識できても，西洋医学モデルでは認識できない可能性は大きい。西洋医学モデルは，個体病理学説，病気実体論で構成されているため，検査で器質的变化がはっきりしたものしか疾病と認識することができないといえる。たとえば，膝の不調を訴える者に西洋医学的検査法で異常が発見できなかった場合，西洋医学では健康の範囲内なので，大腿四頭筋の筋力低下によるものとして大腿四頭筋の筋力トレーニングを指導されることがある。しかし，実際は古代中国医学的検査法では，足の陽明経筋の障害に伴い，胃経の気血の流れが悪いなどの病理学的変化がはっきりしていることが多い。これらの症状に対し筋力トレーニングをすることは，さらに筋肉の緊

張を高め、気血の循環を妨げ、痛み等の症状が進行する場合が多いが、鍼治療をすると改善することが多い。

また、鍼灸師が患者に肝虚証などと告げて治療を行えば、患者は治療後に西洋医学のさまざまな検査を受けて、鍼灸師にどこにも「異常」がなかったことを報告することがよくみられる。このように古代中国医学モデルに基づく検査法で異常が診られても、西洋医学モデルに基づく検査法では異常が診られないことが多い。

以上のことから、治未病の解釈モデルを現代西洋医学に求めては、「治未病」の意味が誤解されて伝わる危険が伴うと考えられる。したがって、ここでは西洋医学モデルによる解釈を一切用いず、古代中国医学モデルによる、古典の著者らが意図する「治未病」の意味を明らかにしたい。

## Ⅱ. 対象・方法

ここでは、「未病」が記載されている古代中国医学の文献である「黄帝内経素問」「黄帝内経靈樞」「難経」を対象として、調査・検討し「未病」本来の意味を明確にしたい。

## Ⅲ. 結果・考察

### 1. 「黄帝内経素問」の治未病

「黄帝内経素問」の「四氣調神大論篇第二」には次のように記されている。

「從陰陽則生，逆之則死。從之則治，治逆之則亂。反順為逆，是謂內格。是故聖人不治已病治未病，不治已亂治未亂，此之謂也。夫病已成而後藥之，亂已成而後治之，譬猶渴，而穿井，闕而鑄兵，不亦晚乎」（篠原監修，1993，p.17）

著者意識「陰陽の法則に則れば、生きることができる。逆に則ることができなければ死に至る。これに従えば疾病は治り、逆らえば体調は乱れる。陰陽の法則に逆らえば、体内と体外の環境が一致しない内格という状態になり、健康状態は崩れる。したがって、聖人は已病（疾が進行して病になった状態）を治さず未病（疾の状態で疾病の急性期や初期を表わす）を治し、已乱を治さず未乱を治すとはこのことをいうのである。已病と呼ばれる疾病が重篤になった状態で薬を与えたり、世の中が乱れてからこれを治めたりすることは、喉が渇いてから井戸を掘ったり、戦争になってから武器を作ると同じことであり、それでは対応が遅いのである。」

この文章の前半に四季に順応した生活様式について記載があるため、ここでいう陰陽に則るという意味は、四季による環境の変化に適応したライフスタイルが疾病の初期の状態に対する治療になると解釈できる。この場合「未病」とは、四季の環境の変化と生体との間に不適應がある状態をいい、「未病を治す」とは生体を取り巻く環境と生体との不調和を治すという解釈ができる。したがって、「未病を治す」「未乱を治す」と表現され、大宇宙と身体という小宇宙との調和が健康であるという「整体」観がここで表れていると考えられる。したがって、「予防」「防ぐ」という表現がとられていないのである。以上のことから未病とは古代中国医学の概念で考えれば、あくまでも疾病の初期に対する治療という概念であると考えられる。この「治未病」の概念はさらに「黄帝内経靈樞」によって具体的に鍼治療の対象として述べられる。

## 2. 黄帝内経靈樞による治未病

「黄帝内経靈樞」の「逆順篇第五十五」には次のように記されている。

「脉之盛衰者，所以候血氣之虛實，有餘，不足。刺之大約者，必明知病之可刺，與其未可刺，與其已不可刺也。（略）上工，刺其未生者也。其次，刺其未盛者也。其次，刺其已衰者也。下工，刺其方襲者也。（略）上工治未病不治已

病】(新刊黄帝内経靈枢, 1992, p.270)

著者意訳「脈を診れば、脈状が盛んになったり、衰えたりすることにより、気血の虚実を知ることができる。刺鍼の原則として、病の状態が、刺鍼の適応なのか、不適応なのか、それとも禁忌なのかを、診断によって知らなければならない。(略) 名医は病が現れる前(疾の状態)に鍼治療を行い、その次の医者は病の勢力が無いうちに治療し、その次の医者は、病が衰えた時に治療し、その次の医者は病が勢いよく襲ってくる時に治療をするが、名医はすぐれた診断力で未病を見つけこれを治し、手遅れとなった已病は手をつけない。」

このように、脈診により気血の虚実を判定し、病理学的変化(疾病の状態)をとらえてから、鍼治療の適応であることを確認し、名医は未病を治療すると記述されている。もし、脈診などの検査で異常がなければ、治療点を求めることができず、鍼治療は不適応となり、「道」の鍛練法が適応となるのである。

### 3. 「難経」による治未病

「七十七難」には次のように記されている。

【七十七難曰、經言上工治未病、中工治已病者、何謂也。然。所謂治未病者、見肝之病、則知肝當傳之於脾、故先實其脾氣、無令得受肝之邪也。

故曰治未病焉。中工治已病者、見肝之病、不曉相傳、但一心治肝。故曰治已病也】(王翰林集諸家補注黄帝八十一難経, 1992, p.235)

著者意訳「七十七難によれば、名医は未病を治し、名医でない者は已病を治すというが、これはどういう意味でしょうか。未病を治すとは、肝に疾病が存在する時に、肝の病は五行の循環の流れに則り、脾へ転移することを知り、先手をうって、脾を治療することにより、ただ転移を防ぐだけでなく、反剋

関係を利用して、肝を治す方法を、未病を治すという。この方法は治療効果が高く、疾病を初期の状態（未病）で治してしまい、已病に移行しにくいのである。名医でない医者は肝の病をみて肝のみを治療するので、転移しやすく、五臓のバランスを崩しやすいために、已病となりやすいのである。したがって、名医でない者は、已病（病が重篤）を治すというのである。』

これによれば、治未病は、「見肝之病」というように、やはり疾病の状態に対して行われている。そして、五十難の病の転移法則に基づき、次に転移する可能性の高い健康な臓器に対して治療が行われている。

#### IV. 結論

以上のことから、治未病とは疾病の予防（第1次予防）ではなく、疾病の治療（第2次予防又は、第3次予防の治療）であることが確認された。

#### 謝辞

稿を終えるにあたり、終始ご指導頂きました中京女子大学大学院健康科学科健康リフレッシュ学講座團琢磨教授、沈再文教授、同健康栄養学講座の田村明教授に深謝いたします。

#### 引用・参考文献

- 1) 王輪林集諸家補注黄帝八十一難經 (1992): 東洋医学善本叢書26. オリエント出版, p.235, 大阪.
- 2) 加藤常賢, 山田勝美, 進藤英幸 (1990): 角川字源辞典 第2版. 角川書店, p.422, 東京.
- 3) 厚生省 (1997): 厚生白書 (平成9年版). ぎょうせい, p.61, 東京.
- 4) 篠原孝市監修 (1993): 明・呉悌刊本黄帝内経素問 黄帝内経版本叢刊 5. オリエント出版社, pp.14-16, 大阪.

- 5) 篠原孝市監修 (1993) : 明・呉梯刊本黄帝内経素問 黄帝内経版本叢刊 5. オリエント出版社, p.17, 大阪.
- 6) 新刊黄帝内経靈枢 (1992) : 東洋医学善本叢書26. オリエント出版, p.270, 大阪.
- 7) 多田羅浩三 (2001) : 健康日本21推進ガイドライン. ぎょうせい, pp.68-69, 東京.
- 8) 藤堂明保 (1977) : 漢字語源辞典 26版. 学燈社, p.444, 東京.